

第2回講演録

「東西の出会い」ーフランス柔道の秘密ー



特定非営利活動法人 柔道教育ソリダリティー
第2回講演会 講演録
東西の出会いーフランス柔道発展の秘密ー
2007年8月27日 講道館

講師:ミッシェル・ブルース
元国際柔道連盟メディアコミッショナー・オフィシャルリサーチャー
ボルドー大学教授(専門:スポーツ歴史学・スポーツ科学)
柔道6段・1969年～1971年 柔道ヨーロッパチャンピオン
1974年 世界ミタリー柔道選手権大会チャンピオン

特定非営利活動法人
柔道教育ソリダリティー 第2回講演会

「東西の出会い」
—フランス柔道の秘密—

国際柔道連盟 ミッシェル・ブルース
2007年8月27日(月)
講道館

フランスでの柔道の成功は、大勢の選手権覇者そしてフランス柔道連盟の会員数が証明しています。国際舞台においては、フランス柔道のリーダーやコーチの組織的能力と指導力は長い間、世界の模範となってきました。人口6,000万人を超える国のおよそ60万人が連盟に登録しており、柔道はサッカー、テニスに次いで3番目のスポーツとして位置付けられています。しかもフランスと日本の地理的・文化的な違いを考えると、日本の方法が実践されているというのは非常に不思議なことです。西洋社会でこれほど深く柔道が浸透している国はほかにないでしょう。英国、ドイツのようなヨーロッパ諸国、あるいは米国やブラジルとは違い、フランスと日本の間には軍事的にも商業的にも強い結び付きはこれまでありませんでした。パリの日本人コミュニティはこれまでずっと、ハワイやカリフォルニアの人たちと比べるとかなり小規模なものでした。1930年の米国在住日本人は279,000人でしたが、フランスの国勢調査では800人を下回っていました。1800年代後半にパリと東京との間に接触はありましたが、フランスは1904年にロシアの側につくことを選択し、日本は1940年、ドイツとともに戦いました。政治的・経済的な関係が実質的に十分に発展したのは、20世紀の終わりまで数十年を残すころになってからです。したがってフランスでの驚くべき柔道の発展は、1948年には柔道をする人が4,000人ほどしかおらず、全員がパリとその近郊在住者であったことを考えればさらに驚くべきことです。

フランス柔道にはどのような「秘密」があるのでしょうか。このような驚くべき数字について理解し、日本の方法がフランスで発達したのはなぜかという問いに答えようとする

ば、2つの時期を区別する必要があるでしょう。日本の戦闘システムというイメージが根付いた時期と嘉納方式の普及時期です。ここで3つの理由が浮かび上がってきます。1つは日本のイメージがフランスに与えた影響に関するものです。フランス人は、伝説的な侍の発祥の地であり、1904年にロシア帝国を打ち負かしたこの国を感嘆して眺めています。伝統的な日本に対する1900年代初期からのこの強い興味は今も衰えていません。

2番目の理由は、フランスと日本のカルチャーギャップを埋めると考えられる手段ということです。文化的製品とされている柔道はフランス人の精神構造に合わせるために変容しました。すなわち、フランスにおいて柔道は「フランス化の過程」を成し遂げたのです。うまく適応したために広まったのです。

3番目の理由は経済的な面に関するものです。伝統的に日本では武道を教えることに商業的な意味合いはありませんでしたが、フランスでは武術は急速に消費財製品と同等の扱いになりました。嘉納方式の伝道者の最初の世代は生徒に最高のサービスを提供するシステムを実現しました。フランスの柔道界においては金儲けはタブーではなかったのです。

日本に対する興味

日本の戦闘術がフランスに根付いたことは時代の精神を反映しています。20世紀初頭の柔術人気をもたらすことになった様々な社会的、文化的そして政治的出来事のゆえに移植が可能だったのです。日出ずる国の芸術的な武力の発見は西洋人の精神構造に強く訴えかけるものがありました。ペリー提督の遠征隊が日本に強制的に西洋との通商や外交関係を結ばせたのをきっかけに、強い興味もたれるようになりました。日本の芸術作品が輸入され、様々な万国博覧会で日本の展示館が設けられたことで美術愛好家、主として印象派の画家たちに強烈な影響を与えました。「ジャパニズム」の影響は大きなものでした。フランスの芸術家たちは日本の文化や美学から新たなインスピレーションを受けました。ジヴェルニーにあるモネの家に押し寄せる現代の観光客は、壁に飾られている数多くの日本の絵を見れば彼の芸術にどれだけ影響を及ぼしたか、

すぐに分かるでしょう。マネやゴッガン、ヴァン・ゴッホそしてその他多くの画家の作品と同様、彼の作品も日本の文化に対する関心の高まりを強めるものとなりました。アジアのデザインやモチーフは極めて人気が高まりました。美術品、ボンチャイナ、文学を始めとする日本の品物や芸術品は多くの人にとって魅力的でした。講演や雑誌・新聞記事では、ユニークで心地よい習慣や伝統をもつ日本人の生活の稀なる魅力が称賛されました。米国のラフカディオ・ハーンと同様、エドモン・ド・ゴンクール、ピエール・ロティ、そしてポール・クローデルもフランスの読者に初めて日本を紹介した有名作家でした。またジュール・ベルヌなども、「八十日間世界一周」で極東についての知識を伝えるのに貢献しました。



キャプション:フランスの政治漫画、1905年

19世紀の終わりになると、日本はアジア全土を通じて政治的にも軍事的にも一流の大国となりました。日本の外交史は新たな段階に入りました。こうした発展とともに、日本は極東地域における影響力を巡ってロシアや中国と競争するようになりました。1905年3月の、日本とロシアの戦争で最も重要な戦いとなった奉天会戦は日本軍の最初の大勝利とされ、多くの人々に日本人の強さを見せつけた、驚くべきものとなりました。白兵戦での日本軍の効率性は見ている者を困惑させました。対馬海峡でロシア艦隊を鎮圧した東郷元帥の勝利によって、この戦争は終結しました。対ロシア戦での日本の見事な勝利は日本の無敵神話を強固なものにしました。単純な宣伝よりも、「鬼のようなロシア人を打ち倒す小さな黄色人」というイメージのほうが柔術の素晴らしい有効性を示すはっきりとした証拠になりました。フランスでは柔術という言葉が登場するのは国際ニュースです。柔術に関する最初の記事は1895年の「両世界

論(*La Revue des Deux Mondes*)」で発表されました。1905年、パリのシャンゼリゼ近くに最初の柔術クラブができました。



キャプション:フランスの新聞、1905年

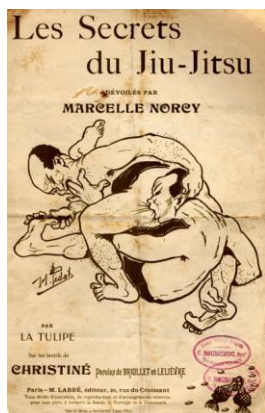
日本人が野球に魅了されたのと同じように、フランス人たちはこの新しい護身術に魅力を感じました。柔術は20世紀初期に流行りました。英国の貴族社会や英国びいきのパリジャンエリートたち — スポーツや身体的活動を自分たちだけのものとして楽しみ、これをステータスシンボル化した人たち — にとっては魅力的なものであったため、柔術は単なる格闘技の一種というものではなくなりました。公正な力の利用というものを復活させました。身体構造上の特徴を正確に理解して用いられるとき、この有用かつ美的な力は強者や無分別な蛮行に打ち勝つことができました。野蛮な攻撃者に対して弱者が用いるものとされ、たるところあらゆる階層のフランス人たちを魅了しました。こうして柔術が正義の手段として用いられるようになると、世間で公に認められることとなりました。

都市部では犯罪率が着実に増加していたため、独特かつ効率的な柔術は非常に重要なものとして紹介されました。20世紀初頭、パリの人たちは貧しい郊外からやって来る悪党や路上強盗、いわゆる「やくざ」を非常に恐れていました。そのため、パリのスポーツ競技の興行主たちは、「柔術でやくざをやっつけよう」という謳い文句を使用していました。当時、柔術はエキゾチックなものとして紹介されました。この時代の新聞雑誌に典型的なセンセーショナルリズムには不可欠の要素でした。



キャプション:「柔術でやくざをやっつけよう」、1905年

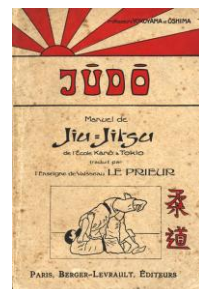
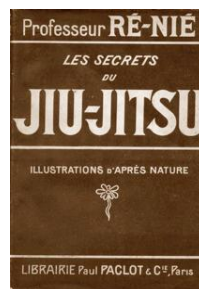
けれどもフランスの柔術はステージで上演されるものであったため、興味がなければ見られることもなく、20世紀初期には十分に発展しませんでした。それでも最初の柔術クラブが閉鎖されてからも、日本の戦闘術は定期的に紹介され続けました。多くの本や歌曲、葉書、漫画そして映画で、「日本の格闘方法」の有効性やその無敵のイメージに対する人気の根強さが強調されています。人々の心に深く刻まれていったことは確かです。



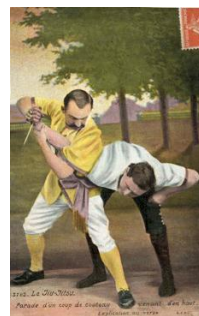
キャプション:歌曲、「柔術の秘密」、1905年

感嘆と敬意、そして同時に恐れもあって、日本の芸術に対する強い興味が沸き起りました。第二次大戦後、このイメージは柔道教師にとって非常に都合がよく、公演には大勢が集まりました。1950年代初期、日本の達人やフランスの有段者による柔道と護身術の技を見ようと、マルセイユ、パリ、あるいはツールーズに集まった人たちは5,000人

を超えました。



キャプション:第一次大戦前の柔術及び柔道に関する本





キャプション: 第一次大戦前の葉書



キャプション: 漫画、1905年

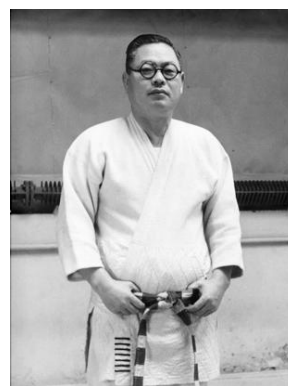
現在もほとんど変わっていません。日本の王者に対する称賛の念は今でも強烈です。顕著な例をあげてみましょう。2007年2月にフランスを訪問した際、山下泰裕氏は行く先々で熱烈な歓迎を受けました。例えばボルドーで柔道

の講義を行ったとき、フランスの柔道家たちは日本で最も尊敬される柔道の王者に対して尊敬と称賛の念を表しました。畳の上には800人が、観客席には700人が集まりました。

1940年代になると柔術と柔道は区別されるようになりました。これと同時に、簡単には埋めることのできない文化のギャップを少しでも縮めようと、嘉納方式をフランス人の精神構造に合わせるための変更も取り入れられました。

「柔道は米か麦のようなものだ、土地に合わせなければならぬ」

川石酒造之助のこの言葉は1940年～50年代のフランスでの変容を理解するカギとなります。川石は1899年に姫路で生まれました。早稲田大学卒業後、1924年に彼はサンディエゴに発ちました。カリフォルニアでは、柔道四段、剣道初段として、日本人コミュニティの人たちに武術を指導しました。



キャプション: 川石酒造之助

それからブラジルのサンパウロに移った後、米国のニューヨークに戻りました。1931年にはロンドンに行きました。4年後、パリにやって来て、1969年に亡くなるまで滞在しました。

川石の方式は147の技に基づいています。講道館五教では取り上げられていない多くの技があります。例えば首投、小釣腰、肘落、持上落、頭固、海老固、胴絞、膝絞、足取固、足門などです。川石は1920年代に本格的に柔道の訓練を受けました。彼の柔道スタイルは、1950年代の講

道館の達人たちのスタイルよりも静的なもので、柔術の影響を受けていました。それでも川石の指導の下、柔道自体は変わりませんでした。指導方法だけが変えられたのです。まず、日本語の技名の代わりに、投技や抑技に番号を付けて分類する方法が用いられました。大外刈は足技1号、出足払は足技2号、膝車は足技3号・・・内股は足技10号・・・本袈裟固は抑技1号、上四方固は抑技3号、横



四方固は抑技5号といったようになりました。技名は覚えやすくなりました。けれどもこうした変更は根本的なものではありません。川石のシステムを特徴付けるものがさらに2つあります。第一に、生徒に教えられる技には護身術も含まれます。社会的状況ゆえに、嘉納は柔道と柔術を区別しました。同じ理由で、川石は発展させるための手段として護身術を利用しました。フランスでは他の多くのヨーロッパ諸国と同様、練習者の主な動機は自らを守ることだったようです。第二に、川石は科学者であるモーシェ・フェルデンクライスの助けを借りて、等級付けの規則を設け、それぞれの級の練習内容と最低練習時間を厳密に示した柔道の講義要綱を編み出しました。川石はロンドンの武道会で実施されていた色帯システムを借用しました。これは1920年代半ばに小泉(軍治)とその弟子たちが発明したものです。川石のシステムでは、6級すなわち白帯は6種類の足投、4種類の腰投、2種類の肩投、1種類の捨身、5種類の抑技そして3種類の絞技を学ばなければなりません。黄帯すな

わち5級の内容は、足投6種類、腰投8種類、肩投3種類、捨身1種類、手技3種類、抑技8種類、関節技1種類、絞技7種類でした。最低練習時間は、緑帯レベルに達するには6か月、茶帯では2年でした。初心者でも3年間、定

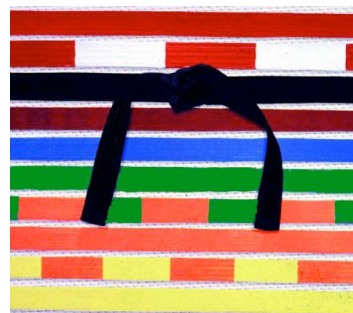
期的な練習を積み重ねれば黒帯の試験を受けられることが分かりました。



キャプション:川石方式

道場の壁に貼られた大きなポスターが、昇級試験に向けて一生懸命練習しようとする練習生たちの励みになりました。こうして柔道の指導は初心者にも理解しやすくなり、コーチたちも教えやすくなりました。

現在このシステムは発展を遂げています。フランス人登録会員全体の約50%が11歳未満です。そこで小さな子供たちのために格子柄の帯の新たな中間級が追加されました。



キャプション:現在のフランスの等級分け

さらに、ゲームや学習課題を用いて指導方法も改善され、どんどん若くなっていく柔道人口の精神的・身体的特徴に合わされてきました。初心者の場合、柔道は運動神経を発達させ行儀作法を身に付けることを目的とした体育教育となりました。



キャプション:フランスにて、夏の海岸での柔道風景

ここでもう1つの側面を取り上げる必要があります。米国や英国においては、柔道は日本人コミュニティや日本愛好家の間で発展しました。嘉納の考えや講道館の規則が根強く存在していました。このような場所では道場は講道館の支部という存在でした。しかし川石の考え方は違っていました。彼はフランス柔道を独立したものにしたいと考えたのです。1948年2月、彼はフランス柔道連盟の会長であったポール・ボネ・モリ宛に英語で次のような手紙を書きました。「今、日本では柔道は統制がとれていません。……私の柔道連盟には400人の有段者がおり、私は国際柔道連合を作ろうとしています。柔道の歴史は全く変わりました。我々は民主的なスポーツ柔道を組織しなければなりません。どうかこれを理解していただきたい。私がパリに戻ったら日本の最もすぐれた柔道家をフランスに招き、大きなことをやってみるつもりです。それがなんであるか分かりますか？強大なフランス柔道連盟は独自の強い影響力を持つべきです。そして、もちろん、もう日本の下にいるべきではありません。日本ではもはや必修の学校柔道はありません。有望な未来があるのはフランス柔道だけです。」独立を目指す戦略にもかかわらず、フランス柔道は常に日本の柔道を崇拝してきました。けれどもフランスのコーチやリーダーたちは、称賛の念と同じようにライバル心やチャレンジ精神ももっていました。こうしてフランスは日本の柔道に対して常に大変な敬意を払ってきたと同時に、独自の柔道スタイルを築き上げたいという強い願望も募らせていったのです。

柔術や柔道はフランスと日本の文化の架け橋となりました。しかし嘉納方式に取り入れられた変更は、彼の哲学や主義から逸脱したものではありませんでした。講道館柔道という文化をフランスの道徳観や慣習に吸収させた結果

だったのです。そしてフランス柔道が成功した最後の理由は、経済的・金銭的なことに関係します。

「柔道はグッドビジネス」

川石は柔道の達人でした。彼はフランス柔道の指導者でもありました。彼はフランス人教師たちに柔道で生計を立てる方法を教えました。つい最近までフランスの道場の大半はプライベートなものでした。1960年代後半まで、たいていの道場の月謝は安いものではありませんでした。当時、柔道はテニスや乗馬あるいはフェンシングなどとは比べ物にならなかったとはいえ、練習に通うのは決して安くはありませんでした。最初に柔道を習った人たちは医者や弁護士、商人など、すなわち中流階級や裕福な人たちだったのです。フランス人のコーチは柔道を教えることで生計を立てていたため、プロとしての教え方に磨きをかけていました。彼らは柔道に身を捧げ、書籍や雑誌、映画を購入し、日本人の専門家による講義に参加するために遙か遠くまで出かけて行きました。サマーキャンプは、家族とともに柔道ファンたちといつも休暇を過ごす黒帯の指導者たちでいっぱいになりました。あまり知られてはいませんが、フランスでの柔道と柔術の指導に関して1955年11月に特別な規定が発布されました。この法律に従って、フランス・スポーツ省が交付する「柔道柔術教授」証書がなければお金をもらって柔道を教えることはできませんでした。このような重要な国家規定はフランス柔道の結束・団結において重要な役割を果たしました。



キャプション:1950年代のパリの個人経営道場

現在、フランスには約7,000人の柔道教師がいます。こ

のうち6%は専任の教師で38%は非常勤の教師です。残りの57%はボランティアです。このことは高い質が期待され、要求されるということをも意味します。その結果が、60万人が会員として登録する団体というわけです。

結論

フランス柔道の秘密はどこにあるのでしょうか？当初の日本ブーム、柔道の「フランス化」、そしてビジネスに対する優れた眼識がこの質問に対する3つの答えです。ただしフランスにおける柔道の成功は模範というよりも、嘉納方式のような文化的製品を西洋の国が取り入れて適応させることができた例といえるでしょう。フランス柔道は伝統の歴史と革新の伝統を発展させました。ここにフランスのパラドックスがあります。日本柔道はフランス柔道にとって絶対的感服の対象です。しかし同時に、尊大にもフランスの独自性を残そうともしています。柔道の世界で起こった適応や変化は嘉納師範の目標が達成されたことを証明しています。柔道は今や、人類の文化的伝承遺産の一部です。こうした変化の中には原初方式の改変と考えられるものもあるかもしれませんが。それでも決して、柔道の精神を損なうものではありませんでした。現実に柔道が世界中に普及するようになったことは、西洋諸国が日本の文化に対して払っている関心、配慮、そして敬意をも示しています。嘉納師範とその弟子たちのおかげで東洋と西洋の出会いが功を奏し、柔道は今や世界中で、21世紀の主要な教育的スポーツと考えられています。



キャプション: 嘉納師範

参考図書

フランス語版

ミッシェル・ブルース、「フランス柔道のルーツ、スポーツ文化の歴史 (*Les racines du judo français. Histoire d'une culture sportive*)」、Presses Universitaires de Bordeaux, 2005, 367 p.

日本語版

細川伸二、「フランスにおける柔術と柔道のルーツ (The Roots of Jujutsu and Judo in France)」(1-4)、天理大学学報 (Tenri University Journal)、第203号、206号、209号、212号、2002-2005年。

訳:(株)インターグループ